

シェイクスピア作『テンペスト』における green の役割と その日本語訳の検討

Gonzalo's Commonwealth: His 'Green' and its Translations into Japanese

大木 シエキエルチャック 絢深 Ayami Oki-Siekierczak

早稲田大学演劇博物館 The Tsubouchi Memorial Theatre Museum, Waseda University
聖心女子大学 University of the Sacred Heart

Keywords: シェイクスピア、英和翻訳、色
のシンボリズム

1. はじめに—greenの語り手について

ゴンザロという登場人物は、ナポリ王に仕える老顧問官であるが、一見したところでは『テンペスト』の主要な登場人物のひとりであるとは見極め難い。しかしながら、物語の進むきっかけを分析してみると、その役割の大きさに驚かされる。戯曲の中で彼が担うのは、島の美しさ、島での恐ろしい体験、奇跡的な和解などについて語る語り部としての役割であり、プロスペローによって「正直者」(III.iii.34)、「心正しいゴンザロ」(V.i.15)、そして「誉れ高き友」(V.i.120)など(Cf.V.i.68-70)と呼ばれていることからわかるように、彼は信頼できる語り手として扱われている。本発表では、シェイクスピアの戯曲『テンペスト』においてゴンザロが発する‘How green!’(II.i.54)という台詞を通し、戯曲中のgreenの機能と、特に坪内逍遙の作品に注目しながら、その日本語訳を検討する。

2. Greenの語り手の重要性

ゴンザロの重要性を裏付けるものとして、プロスペローの魔法の本に関する出来事がある。この本は、プロスペローに島を支配するのに欠かせない魔法を与えてくれるが、彼が娘ミランダに語ったところによると、国を追われる際に、ゴンザロが他の必要な品物と共に、蔵書の中から特に

領土よりも大切にしてきた本を持たせてくれたという(I.ii.159-168)。この本なしに、プロスペローは正統な後継者であった筈のキャリバンに取って代わり島を支配することも、島の自然を支配することもできないだろう。プロスペローの奴隷となったキャリバン自身、ゴンザロの渡したこの本の重要性について語っている。(III.ii.85-101)。この実際に目に触れることのない魔法の本が、舞台上の社会をコントロールする力の源となっており、支配、植民地などの主題と深く関連していると考えられる。

3. 『テンペスト』におけるgreenの役割

仮面劇におけるアイリスやセレースの台詞(IV.i)、プロスペローが魔法の輪を描きながら言う台詞(V.i)にみられるように、『テンペスト』において色名 green は自然の力と非常に密接に関わっている。当時の自然と人間との対峙について考察してみると、緑を切り崩し、自然を利用して囲い込むことは、土地の所有、支配の問題と深く関わっていた(Theis 2-3)。「How green!」という言葉に続くゴンザロの台詞には、彼の理想の社会構造について描かれているが(II.i.141-166)、『随想録』第1巻31章「カンニバルについて」においてモンテーニュが示したカルタゴの政策を理想として掲げたことを彷彿とさせる(Wilson-Okamura 718) (Cf.繰り返し言及される「ダイドー」、「イーニラス」、「カルタゴ」/『アエネイス』(A, 4.700-5)を思い起こさせる「サフラン色の翼」(IV.i.78))。想像上の

入植された島は、カルタゴの支配を連想させると共に、ゴンザローがエリザベス朝のイギリス人入植者と冒険家に触れる時、現実味を帯びてくる。ゴンザローは見知らぬ国へ出かけて戻ってきた者たちへの報酬や報告について語り(III.iii.47-49)、島に対して抱く畏怖の念や島に存在する自然の驚異について話す(V.i.104-6)。外界から孤立した島は植地的な幻想をもたらし、ゴンザローが島に対して抱く印象は、greenの持つ広範囲に亘るシンボリズムと同様、入植者が対峙した新世界の様々な様相を映し出す。

4. シャイクスピア作品にみられるgreenの

象徴的意味

Greenは新鮮さ、植物から連想される豊穡などのイメージを喚起する。しかし、植物のイメージは豊穡と共に未熟な果物を守る果皮の毒々しい苦味をも思い起こさせる。(Heather 56,172 / Milward 41-44)。瑞々しさの意味合いをもったgreenは、シェイクスピア作品において『ヘンリー四世第2部』では悲嘆(IV.iii)、『ハムレット』では記憶(I.ii)などの新鮮さを表すためだけでなく、比喩的に人間の若さについても使われる。『トロイラスとクレシダ』においてエイジャックスの年齢が若い様子を表し(II.iii)、『アントニーとクレオパトラ』では、クレオパトラが若き日のナイーブな決定力について語る(I.v)。このイメージは、『ロミオとジュリエット』(II.ii / III.v)、『ペリクリーズ』(xix)では貧血による体調の異常や処女性と若い娘を結びつけられ、二日酔いのイメージと結びついて『アントニーとクレオパトラ』(III.ii)、『マクベス』(I.vii)に登場する。また、『オセロー』(III.iii)、『ヴェニスの商人』(III.ii)においてgreenの目をした嫉妬のイメージに言及され、『十二夜』(II.iv)でyellowと共に憂鬱と関連付けられているセリフでは、greenが精神的な毒性

と連想づけられている。シェイクスピア作品を通じて、健康、快活、発育から腐敗や破壊までgreenの多様なイメージが展開されている。

5. 坪内逍遙によるgreenの日本語訳

坪内逍遙はゴンザローの‘How lush and lusty the grass looks! How green!’(II.i.54)という台詞を「草が如何にも滋々と生茂ってをります。如何にも青々と！」(1921)と訳した。Greenとして受け止められている色合いやその象徴的意味は、日本語では「青」によって表現されるケースがあり、特に、前述した若々しさ、未熟さなどに用いられる。坪内は、日本語のgreenの一般的な訳語である緑がもともとは瑞々しさを表す語だったことを踏まえた上で、英語色名greenの意味を包括しながらも、青という非常に広い色の範囲を持つ語を使って表している(Cf.日本国語大辞典)。福田恒存の「それ、あの瑞々しく見事な草の繁りよう！何と、まあ、青々と！」(1971)をはじめとする後の翻訳と検討してみると、その手法が受け継がれていることが分かる。

参考文献：

- 1)日本国語大辞典(第二版)東京：小学館，2002.
- 2)Greenblatt, Stephen, Walter Cohen, Jean E. Howard, and Katherine Eisaman Maus, eds. *The Norton Shakespeare: Based on the Oxford Edition*. New York: Norton, 1997.
- 3)Heather, P.J. ‘Colour Symbolism Part I.’ *Folklore* 59 (1948): 165-83.
- 4)Milward, Peter. *The Silent World of Colour: in English Words*. Ed. Shōichi Watanabe and Kazu Nagamori. Tokyo: Nan’un-Do, 1978.
- 5)Montaigne, Michel de. *Montaigne’s Essays*. Trans. John Florio. London: Folio Society, 2006.
- 6)Shakespeare, William. *The Tempest*. Ed. Orgel, Stephen. Oxford: Oxford UP, 1987.
- 7)Theis, Jeffrey S. *Writing the Forest in Early Modern England: A Sylvan Pastoral Nation*. Pittsburgh, Pa.: Duquesne University Press, 2009.
- 8)Wilson-Okamura, David Scott. ‘Virgilian Models of Colonization in Shakespeare’s *Tempest*.’ *ELH* (2003): 709-37.
- 9)Virgil. *The Aeneid*. Trans. John Dryden. London: Folio Society, 1993.